

**J** **apanese text**

2017年 秋/冬号 日本語編

根付帯留

**由緒正しき日本の装身具**

撮影=中村 淳 スタイリング=阿部美恵

文=編集部 取材協力= Uyeda Jeweller

p.030

根付とは、小物を入れる巾着や煙草入れなどを持ち歩く際に帯に留めるための道具。そして帯留とは、帯の上から締める帯締めに通す金具。どちらも和装のための装身具で、根付は江戸時代初期、帯留は江戸時代後期に作られ始め、やがて工芸品として発展していく。今回ご紹介するのは、水戸徳川家の流れを汲む高松松平家の蔵で大切に保管されてきた、昭和初期の3名工が制作した由緒正しき工芸品。十二支をモチーフとした美しい作品をご覧ください。

根付、左上から「ねずみ」「うし」ともに桂 光春作、「とら」岡田雪峨作、「うさぎ」森田一静作、「たつ」「へび」「うま」「ひつじ」「さる」「とり」「いぬ」以上すべて岡田雪峨作、「いのしし」桂 光春作

p.032

**精緻な技術と遊び心が盛り込まれた伝統工芸の美**

装身具史研究家 露木 宏

中国から伝わった暦法、<sup>えと</sup>これは<sup>じっかん</sup>十干と十二支を組み合わせた60を周期とした数詞で、暦のほかに時間や方位を示すのに長い間用いられてきた。現在の日本は世界のほとんどの国と同じく西暦（グレゴリオ暦）を用いているが、年を数えるのに今でも十二支（ねずみ、うし、とら、うさぎ、たつ、へび、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、いのしし）をあてている。たとえば2017年はとり年、2018年はいぬ年。自分の生まれた年の干支をラッキーモチーフとする人も多く、日本人にとって干支は身近な存在なのである。

さて今回、高松松平家が公開してくださったこの根付と帯

留は、その十二支をモチーフとしている。現14代ご当主の祖父母、つまり高松松平家第12代当主、松平頼壽伯爵夫妻のものだという。一つの干支を同じ作家が作っているが、根付と帯留で少しずつデザインを変えているところが面白い。こうして干支で何かを揃えるのは相当の趣味人だったか、はたまた嫁入り道具だったか。作家は3名とも昭和初期に活躍した名工たちで、この根付と帯留の制作年間も昭和4～8（1929～33）年と明記されている。日本はこの後、昭和12（1937）年から戦時体制となるため、現存する昭和の彫金技術のコレクションとしても非常に貴重なものだといえるだろう。

<sup>しゃくどう</sup>赤銅、<sup>しぶいち</sup>四分一、<sup>きんたみ</sup>金彩、<sup>そうがん</sup>象嵌、色あげ、金象嵌など、日本の彫金の伝統技術のすべてが盛り込まれているのも特筆すべき点だろう。またそれぞれの動物たちを抽象化し、遊び心のある粋なデザインとしたところには、“用の美”を掲げたアーツ・アンド・クラフツ運動の影響が垣間見える。装身具としての軽やかさ、愛らしさを模索したところに、当時の新芸術運動の流れが感じられるのだ。

さて3人の作家だが、最も有名なのは桂 光春だ。多くの受賞歴があるため桂の作品は高価がつけられているが、この根付と帯留を注文した高松松平家12代目は、そうした芸術活動を理解し、支援する活動をしていたのであろう。昨今はすっかり海外のジュエリーに押され気味の日本だが、こうして改めて日本ならではの美しい工芸品を見ると、我々が培ってきた技術を進化させ、未来へとつなげていくことの必要性をひしと感じる。

**露木 宏**

日本を代表する装身具史研究家。日本宝飾クラフト学院理事長、NPO 法人宝飾クラフト教育振興会会長、ジュエリー文化史研究会主宰。

帯留、左上から「ねずみ」「うし」ともに桂 光春作、「とら」岡田雪峨作、「うさぎ」森田一静作、「たつ」「へび」ともに岡田雪峨作。右上から「うま」「ひつじ」「さる」「とり」「いぬ」以上すべて岡田雪峨作、「いのしし」桂 光春作

(p.033)

**桂光春（かつらみつはる）**

彫金家。明治 15（1882）年、彫金家豊川光長の門に入り 15 年後に独立。明治 43（1910）年英国皇帝戴冠式に皇室より献上の純銀製金象嵌大花盛器に鳳凰の図を謹作。大正 13（1924）年パリ万博に政府の依頼で出品、昭和 8（1933）年シカゴ万博に出品し受賞など、内外博覧会・展覧会での受賞は数十回に及んでいる。

**岡田雪峨（おかだせつが）**

彫金家。東竜齋派の高橋良次に学ぶ。明治 7（1874）年から宮内省御用を務め、21（1888）年には皇后<sup>はひよう</sup>御用の宝冠副章を調製した。

**森田一静（もりた いっせい）**

彫金家。明治 42（1909）年に彫金家である三代・府川一則に入門。昭和 6（1931）年に帝展入選。額、置物、金具の制作が残っている。

残された日本の美意識の結晶を、大切に次の世代へと伝えてまいることが、私どもの役目だと思っております」。

かつて一つ一つの作品が入っていた箱の、作品名と作家銘を入れた上蓋だけを残し、根付と帯留あわせて 24 品を上下 2 段に収納できる桐箱を眺めてある。そっと蓋を開け、小さくて美しいものが並ぶ様子を眺めるのもまた、なんともいえず幸せなものである。

p.034

**小さきものの中に美を見出す  
日本らしいまなざし**

水戸徳川家の流れを汲む高松松平家第 14 代当主松平頼武ご夫妻は、お国である高松と、ご自宅のある東京とを頻りに行き来する毎日を送られています。「先祖代々の思いを継いで家を守ってきた祖父母からは、本当に多くのことを学びました。私どもにとって祖父母が残してくれたものは、単なる“もの”ではなく、家の歴史であり、日本人の心でもあると思っております」。

「祖父は貴族院議長、本郷学園理事長・校長など要職を務めながら、能楽の振興に尽力するとともに小品盆栽の収集家として、それはたくさんの小品盆栽を丹精こめて育てておりました。祖母は謡を趣味とする、とてもお洒落な女性。生涯を和装で通しましたので、この根付や帯留も折に触れ大切に身につけていたのではないのでしょうか。盆栽といい、この工芸品といい、小さいものの中に美を見出す、たいへん日本的な心のありようが祖父母の中にはあったように思います。洋装の時代となった現代ではありますが、こうして手もとに